

# キリスト教葬儀式文の変遷

中道 基夫

## はじめに

プロテスタント各教派の葬儀式文は多くの共通部分を持っている。共通した聖書箇所が読まれ、祈りの言葉も同じものが含まれている。教派が違うにもかかわらず同じ内容の式文が使われているのは、何か一つの基礎となる葬儀式文が存在し、それが各教派の式文に影響を与えていることが考えられる。

まず考えられるのが、宗教改革者のルターやカルバンによって作られた葬儀式文が各教派に影響を与え、それが今日に至るまで残されているということである。次に考えられるのが、宗教改革の精神を受けて最も早く礼拝式文を編纂した英国国教会の *The Book of Common Prayer* (以下 BCP と記す) が各教派の式文に何らかの影響を与えているということである。

葬儀式文の変遷をたどりつつ、どこにプロテスタント教会の葬儀式文の源泉があるのかを探り、カトリックの葬儀との違いを、特に宗教改革においてテーマとなった煉獄思想をどのように克服したかを明らかにすることが本論文の目的である。

新約聖書からプロテスタント教会の葬儀式文の源泉となる式文に至るまでの歴史を概観し、その式文の内容を詳細に分析し、そこに表れた葬儀理解を明らかにする。

## 1. キリスト教葬儀の歴史

### 1.1. 初期キリスト教会

初期キリスト教会の時代から、キリスト教葬儀の典礼が整っていたわけではなく、ユダヤ教やキリスト教が宣教された地方の諸宗教・慣習の影響を受けて葬儀が行われていた。

新約聖書の中に葬儀に対する具体的な指示はなく、むしろ自分の亡くなった父の葬りを行いたいと申し出た弟子に対してイエスは「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」(マタイ 8:22、ルカ 9:60) と死者を葬ることに對して否定的な態度を示している<sup>(1)</sup>。その一方で福音書の中にはラザロの葬り(ヨハネ 11章)やイ

(1) この言葉をもって、キリスト教では死者儀礼を重視してはいけないという戒律を主張することは出来ない。この言葉はユダヤ教において親族を葬ることは十戒の第五戒「父母を敬いなさい」に基

## キリスト教葬儀式文の変遷（中道）

エスの葬り（マタイ 27:57-61、マルコ 15:42-47、ルカ 23:50-56、ヨハネ 19:38-42）の記事があり、ユダヤ人の慣習に従った埋葬の様子がうかがえる。葬儀は人間の人生における基本的な儀礼ではあるが、新約聖書においてその儀礼をキリスト教が担うべきであるという考えも、その典礼に関する指針も見いだすことは出来ない。

しかし、初期キリスト教会は、まったく葬儀に関わらなかったわけではない。その宣教活動において、直面する他宗教・文化と対立するのではなく、その宗教的・文化的土壌に適応する方策を柔軟にとっていた<sup>(2)</sup>。それゆえ、独自の死者儀礼を発展させるのではなく、各地の習俗を取り入れつつキリスト教の死者儀礼を構築していた<sup>(3)</sup>。教会は各地方の伝統的風習を取り入れつつ、死者儀礼に徐々にキリスト教的要素を加え、キリスト教的に再解釈していった。また、一部分伝統的なしきたりと違うことを行うことによって、キリスト教の福音理解に基づいた独自の死者儀礼も創り出している。

古代の教父たちの文献の中にキリスト教葬儀に5つの主たる要素を見いだすことが出来る。第一に、家での祈りである。キリスト教信者が遺族の家に集まり、祈りと共に遺体を洗浄し、聖別のための塗油を行い、遺体を布で包んだ。第二に、ローマで行われていた葬列をキリスト教でも取り入れた。しかし夜に行われていた葬列を、キリスト者は昼間に行い差別化を図った。その際白い服装をまとい、希望の詩編と勝利のハレルヤを歌いながら葬列を行うことによって、葬儀をキリスト教的に再解釈した。第三に、死者のための礼拝式が行われていた。ただ今日のような整った礼拝ではなく、死体を囲んでの短い礼拝であり、そこで賛美と感謝が捧げられ、聖書が読まれた。第四に、聖餐を執り行っていたことが挙げられる。聖餐は、生者と死者との間に存在する親交を表現するものであった。葬儀における会食に代わるものであったのであろう。第五に、埋葬方法がキリスト教独自のものであった。義の太陽の到来への希望のしるしとして、復活の時に太陽に向かって起きあがることが出来るよう、足を東に向けて遺体が安置された。平安と希望、死の力の非絶対化が葬儀のテーマであり、死者に対する祝福の祈りが語られた。このように外面的には伝統的な葬儀の風習に倣いつつも、内容的にはキリスト教化していった。

ㄨ づく神聖な義務と考えられていた（レビ 21:2 参照）こととのコントラストで終末時の倫理の緊急性を表すものである。

(2) J. A. ユングマン著・石木祥裕訳『古代キリスト教典礼史』、1997年、平凡社、158頁を参照。

(3) 例えば、『ローマ・ミサ典礼書』によると、死者のためのミサは3日目、7日目、30日目に行われていた。この日取りは今日まで守られ、またエジプトのキリスト教でも同じ日に行われていた。シリア、ギリシャの教会では若干の違いがあるがほぼ同じような日取りで死者のためのミサが行われている。その日取りはキリスト教以前の古代世界の伝統にさかのぼるものである。同書、159頁を参照。死者記念の具体的な慣習やその背景に関しては、159-162頁を参照。

## 1.2. 中世 ローマ・カトリック教会

中世の葬儀の特徴は、死のキリスト教化と葬儀のテーマの変化、死者儀礼の発展もしくは複雑化である。

キリスト教における死に関する儀礼は、古代においてはそれぞれの地域の習俗に影響されながら、確固たる典礼を形成することはなかった。しかし、9世紀後半になって、人間の生の根幹ともいべき死についての儀礼が教会の中で形成され、キリスト教が死に対しても影響を与える存在となった。つまり死のキリスト教化がなされてきたわけである<sup>(4)</sup>。

古代の葬儀のテーマであった死に対する勝利や死に勝る平安や希望は中世にも受け継がれた。最も古いキリスト教死者儀礼書である“ordo defunctorum”も死に勝る平安や希望に基づいて書かれている<sup>(5)</sup>。中世初期の儀礼としては古代の儀礼が若干発展し、一般的に臨終の儀礼、死体の処理、教会への葬列、教会での礼拝、墓地への葬列と儀式、埋葬、埋葬後の儀礼が行われていた。

しかしながら、9世紀になると希望や平安のテーマが、徐々に裁きや懺悔に変わってきた。神は人間の死に際して裁き主であると共に人間に赦しを与える神であるというイメージが強まってきた。

死者儀礼のテーマの変化は典礼にも影響を与えた。特に臨終における儀礼は徐々に変化してきた。基本的な形として、キリストの受難物語を朗読し、詩編を暗唱し、リタニー、viaticum「臨終の聖餐」と呼ばれる最後の聖餐が行われていた。ここから、さらに懺悔と赦しのモチーフが加わり、儀礼がさらに手の込んだ形式へと発展した。具体的には、塗油、告解、罪の赦しなどが加えられていった。

さらに死者儀礼を複雑化させたのが、修道士の影響である。修道士には修道士独特の死者儀礼があった。臨終の際に修道士は自らの罪の告白をし、塗油を受けた後で、修道士の集まるところへ運ばれ、公に罪が告白され、その罪の赦しが宣言された。その後、会衆は詩編を歌いながら、臨終の修道士のもとへと進んだ。死を間近にした修道士は cilicium (苦行衣・粗布)<sup>(6)</sup>の上に置かれ、悔い改めのしるしとして灰が振りかけられた。集まった会衆は信仰告白を告白し、リタニーを唱え、応唱、詩編唱をおこなった。死の瞬間においては、神に死者の魂を委ねる祈りがなされた。

(4) 中世における死のキリスト教化については、Paxton が詳細にそのプロセスを論じている。Frederick S. Paxton, *Christianizing Death The creation of a Ritual Process in Early Medieval Europe*, Ithaca : Cornell University Press, 1990 を参照。

(5) ordo defunctorum については、ibid., pp. 37-44 を参照。

(6) cilicium はらくだや馬などの毛で織られた粗布であり、旧約聖書では列王記上 21:27 「アハブはこれらの言葉を聞くと、衣を裂き、粗布を身にまとして断食した。彼は粗布の上に横たわり、打ちひしがれて歩いた」とあるように悔い改めの象徴であり、新約聖書では人々に悔い改めを求めたバプテスマのヨハネが身にまっていた (マルコ 1:6)。4世紀以降、教会の中でも特に修道士たちによって悔い改めのしるしとして身にまとわれていた。

## キリスト教葬儀式文の変遷（中道）

この修道士に対してなされていた死者儀礼が、徐々に一般信徒の間でも行われるようになったため、一般的な葬儀も複雑になっていった。その一方で、癒しや回復のしるしである塗油が段々と少なくなり、罪の告白、懺悔、最後の聖餐がより重要視されるようになった。

亡くなった時点で、いくつかの commendation（死者を神に委ねる）の祈りが詩編や応答頌歌によって唱えられた。そして、詩編と応答頌歌が歌われる中で体が洗われ、次に洗礼においてキリストをまとったことを思い起こしながら死者に服が着せられる。教会に運ばれる葬列でも詩編や応答頌歌が唱えられ、それは埋葬までとぎれることなく続けられた。遺体を運ぶ際には火がともされ、香がたかれた。墓地でも祈り、詩編、応答頌歌がなされた。墓穴には聖水がまかれ、遺体の悪臭を消すために香がたかれ、キリストにおいて死んだ人々の勝利を表すために月桂樹が置かれた。

死者儀礼は埋葬によって終わるのではなく、死後、遺族には命日と 30 日ごとに死者を記念することが勧められた。

このように様々な儀礼が発展し、複雑化すると、次第に教会が死への恐怖に対抗するために不可欠な存在へと創り上げられていくこととなった。また、最後の審判において人は永遠の命を得るか、永遠の死に至ることとなると考えられており、最後の審判に至るまでの魂の状態にある死者に対しても教会は影響力を持つものとなった。ここでは、死そのものではなく、死に方が問題である。伝染病、戦争、飢餓などによって死はむしろ日常生活の中で近くにあり、人々は死は避けられないものであることを痛感していた。そのような状況で、恐れるべきことは死そのものではなく、死に方を誤ることであった。つまり、教会の儀礼に則って死ぬことが重要であり、葬儀を厳粛に行い、「正しく」埋葬されなければならないと人々は考えたのである。それは宗教改革において問題となった贖宥状に象徴されるように、「正しい」死者儀礼は煉獄にいる死者に対しても影響を及ぼす力を持つと信じられた<sup>(7)</sup>。

### 1.3. 宗教改革

ルターがもっとも問題にしたのが、贖宥状が煉獄における死者の魂の救いをもたらすという考えであった。死者儀礼に関わる贖宥状を否定したのであるから、それに代わる死者儀礼についての教えを明確に示し、葬儀に関する明確な礼拝の指示を与えたかという点、そうではなかった。ルターは葬儀に関してカトリック的・中世的な考えや儀礼を排除したが、それに代わるものとしていくつかの賛美歌と葬儀の時に読まれ

(7) 中世の死生観については、ハンス・ヴェルナー・ゲッツ著・津山拓也訳『中世の聖と俗 信仰と日常の交錯する空間』、八坂書房、2004年、136-203頁を参照。ゲッツは中世の死者儀礼において神学思想と民衆文化とを区分することが難しく、死が大きな存在感を持っていた時代に教会が大きな力を持つに至ったことを多くの中世文献を引用しながら明らかにしている。

る聖書の箇所と司式上の簡単な指示を提供しただけであった<sup>(8)</sup>。ルターは典礼の刷新を必要なことと考えていたが、第二義的なものに過ぎなかった<sup>(9)</sup>。それゆえ特にルター派独自の葬儀式文は考案されず、単に中世において複雑化した死者儀礼が排除される形となり、非常に簡素なものへと変わっていった。

ルター派の教会で葬儀式文が整えられたのはようやく19世紀の半ばであり、それも英国国教会の1552年のBCPの式文を援用したものであった。

しかし、ルターは葬儀式文こそ作らなかったが、葬儀の意義については新しい見解を示している。ルターは葬儀を洗礼の完成と見なし、中世において強調された悔い改めと赦しのテーマは退き、赦しの約束と死者の復活への希望、悲しむ者たちの慰めが強調されるようになった。葬儀説教は16世紀には聖書的なものであったが、17世紀になると個人を称賛し、その略歴を語る説教へと移っていった。

#### 1.4. 英国国教会

英国国教会のBCPは、カトリックの流れを汲むと共に、ルターの影響を強く受けたものである。英国国教会には8世紀頃に伝えられたギリシャ語典礼に基づいて作られた『セイラム行列儀式書』（セイラム式文）が受け継がれており、BCPはこのセイラム式文に基づいて作られた。

その一方で、1521年にはルターの著作が広く普及しており、カンタベリーの大主教であり英国国教会の宗教改革を行ったクランマーもルターの影響を強く受けた一人であった。さらに、ルターの神学に基づいて作られたマルティン・ブツァーの礼拝書『神のみ言葉にもとづく宗教改革』（1543年）<sup>(10)</sup>の強い影響をも受けている。

クランマーはBCPを編纂する際に、ルターの礼拝に関する原則である「それがもしも神の御言葉にはっきりと違反していないならば、人は決して変えてはならない。それがもしも神ご自身が御言葉ではっきりと述べておられないならば、人は決してそれを厳密に述べてはならない」<sup>(11)</sup>に則り、カトリック教会のすべてを批判するのではなく、聖書的に検討した上で伝統を受け継いでいった。

BCPの葬儀式文については、意識的であったかどうかは別にしてカトリックの煉獄思想を残しつつもそれを克服し、復活の希望を語ることに重点が置かれている。以下、BCPの葬儀式文について詳細に分析する。

(8) Martin Luther, *Vorrede zur Sammlung der Begräbnislieder 1542*, in Herg. Kult Aland, Luther Deutsch Bd. 6, 1966, Stuttgart: Ehrenfried Klotz Verlag, S. 170-175 を参照。

(9) W. ナーゲル著・松山與志雄訳『キリスト教礼拝史』、教文館、1998年、159頁を参照。

(10) この書は、ブランデンブルク＝ニュルンベルクの教会規定に基づき、ケルンの大主教ヘルマン・フォン・ヴィートの指示により、メランヒトンの協力のもとブツァーが執筆した。

(11) ナーゲル、前掲書、184頁より引用。

## 2. The Book of Common Prayer<sup>(12)</sup>の葬儀式文

### 2. 1. BCP（1549）

1549年の第1祈禱書の葬儀式文はセイラム式文を基礎として編纂されている。その構造は葬列・埋葬・礼拝・聖餐である。中世のローマ・カトリック教会の順序と比較するならば、埋葬が先に行われ、その後に礼拝、聖餐が行われていることが変化することがわかる。しかし、礼拝を埋葬の前に行う可能性についても言及されており、基本的に中世のローマ・カトリック教会の葬儀順序を踏襲したものであると考えられる。

#### 2. 1. 1. 葬列

葬列において唱えられる聖句（ヨハネ 11:25、ヨブ 19:25-27、1テモテ 6:7とヨブ 1:21を合わせたもの）は独立したものではなく、またその内どれかを選択するものでもない。この3つの聖句が交唱されることによって、葬儀の基調を明らかにしている<sup>(13)</sup>。最初の2つの聖句（ヨハネ 11:25、ヨブ 19:25-27）はセイラム式文から引き継いだものであるが、第3の聖句（1テモテ 6:7とヨブ 1:21）は中世には見られないものである<sup>(14)</sup>。

ヨハネ 11:25は、新約聖書における復活と永遠のいのちの教えを要約するものであり、イエスの復活の力を強調し、それを信じる者が復活のいのちに与ることの告白と共に、それを信じるかどうかの決断を迫っている。そして、その応答としてヨブ 19:25-27「私は知っている／わたしをあがなう方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう」の言葉をもって復活の主に対する信仰が言い表されている。そして第3に、新約の1テモテ 6:7「わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです」と旧約のヨブ 1:21「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」の言葉が合わされて、この世界で人間の生命のはかなさとその地上でのいのちの主が神であるという告白が「わたしたち」（1テモテ 6:7）の言葉として語られている。

ここには、中世のローマ・カトリック教会の葬儀のテーマであった悔い改めや罪の告白を迫る言葉はなく、葬儀の最初において復活の希望が語られている。さらに、葬

(12) 歴史的な The Book of Common Prayer は、解説と共にインターネット上で公開されている。本論文で引用したものはすべて The Book of Common Prayer のホームページからダウンロードしたものである。<http://justus.anglican.org/resources/bcp/england.htm>

(13) M. H. Shepherd, Jr., *The Oxford American Prayer Book Commentary*, New York: Oxford University Press, 1973, p. 324 を参照。

(14) Marion J. Hatchett, *Commentary on the American Prayer Book*, New York: Harper, 1995, p. 479 を参照。

## 英国国教会と日本の教会の葬儀式文の比較

英国国教会 The Book of Common Prayer				日本基督教会 信条及諸式	日本メソヂスト 教会礼文
1549	1552	1662	1689	1907	1907
葬列	葬列	葬列	葬列	先導	先導
ヨハネ 11:25-26	ヨハネ 11:25-26	ヨハネ 11:25-26	ヨハネ 11:25-26	ヨハネ 11:25-26	ヨハネ 11:25-26
ヨブ 19:25-27	ヨブ 19:25-27	ヨブ 19:25-27	ヨブ 19:25-27	ヨブ 19:25-27	ヨブ 19:25-27
1 テモテ 6:7+ヨ ブ 1:21	1 テモテ 6:7+ヨ ブ 1:21	1 テモテ 6:7+ヨ ブ 1:21	1 テモテ 6:7+ヨ ブ 1:21	1 テモテ 6:7	1 テモテ 6:7
		教会：礼拝	教会：礼拝	教会もしくは家にて	教会もしくは家にて
		詩編 39	詩編 39	詩篇 90 編	詩篇 90 編
		詩編 90	詩編 90	1 コリント 15:20- 26、35-58	1 コリント 15:20- 26、35-58
		1 コリント 15:20-58	1 コリント 15:20-58		
			寒い時期 1 テサ ロニケ 4:13-18		
埋葬	埋葬	埋葬	埋葬	墓にて	墓にて
ヨブ 14:1-2	ヨブ 14:1-2	ヨブ 14:1-2	ヨブ 14:1-2	ヨブ 14:1-2	ヨブ 14:1-2
応答頌歌	応答頌歌	応答頌歌	応答頌歌	土を入れる時	土を入れる時
1: I commend thy soul to God	1: Forasmuche as it hathe	1: Forasmuche as it hathe	1: Forasmuche as it hathe	式辞	式辞
2: I hearde a voyce from	2: I hearde a voyce from	2: I hearde a voyce from	2: I hearde a voyce from	讚美歌	讚美歌
祈祷	1 コリント 15:20-58			ヨハネ黙示録 14:13	ヨハネ黙示録 14:13
1: 遺族のために	キリエ	キリエ	キリエ	キリエ交唱	キリエ交唱
2: 死者のために		主の祈り	主の祈り	祈祷 a	祈祷 a
教会：礼拝		祈祷 (司祭)	祈祷 (司祭)	祈祷 b	祈祷 b
詩編 116	祈祷 (司祭)	祈祷	祈祷	主の祈り	主の祈り
詩編 139	祈祷	祝祷	祝祷	祝祷	祝祷
詩編 146					
1 コリント 15:20-58					
キリエ					
主の祈り					
祈祷					
聖餐					
詩編 42					
祈祷					
1 テサロニケ 4:13-18					
ヨハネ 6:37-40					

儀の中心にあるのは死者ではなく、そこに参列した会衆であり、死者の魂の救いよりも葬儀に参列した会衆自身のキリストの復活への信仰が問われる内容になっている。

### 2.1.2. 埋葬

埋葬に際しては、まずヨブ記 14:1-2 が読まれる。

女から生れる人は／日が短く、悩みに満ちている。彼は花のように咲き出て枯れ、／影のように飛び去って、とどまらない。

## キリスト教葬儀式文の変遷（中道）

これはセイラム式文の死についての朝祷より引用したものである。

この聖書の言葉に続いて、セイラム式文のレントの第3から第5週日における終祷から引用した祈りが読まれる<sup>(15)</sup>。

In the midst of life we are in death : of whom may we seek for succour, but of thee, O Lord, who for our sins art justly displeased? Yet, O Lord God most holy, O Lord most mighty, O holy and most merciful Saviour, deliver us not into the bitter pains of eternal death. Thou knowest, Lord, the secrets of our hearts ; shut not thy merciful ears to our prayer ; but spare us, Lord most holy, O God most mighty, O holy and merciful Saviour, thou most worthy judge eternal, suffer us not, at our last hour, for any pains of death, to fall from thee.

この祈祷文はスイスのザンクト・ガレンの修道士 Notker の作であるといわれており、ギリシャ典礼の Trisagion（三聖誦）<sup>(16)</sup>を思わせるものである<sup>(17)</sup>。その内容は、死への恐れや不安、罪に対する裁きとしての死が語られながらも、救い主であり審判者であるイエス・キリストの恵みによってのみ死からの解放があることが述べられている。

司祭は、墓の中に納められた遺体に土を掛けながら、次の言葉を語る。

I commend thy soule to God the father almighty, and thy body to the ground, earth to earth, ashes to ashes, dust to dust, in sure and certayne hope of resurreccion to eternall lyfe, through our Lord Jesus Christ,

この言葉はセイラム式文から用いられたものであり、この言葉に続くようにして、フィリピ3:21の言葉が述べられる。

キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

この二つの言葉があわせられ、肉体は滅び行くものであり、土の塵から造られた体はその本質から土に帰るものであるが、キリストの恵みを受けてその滅び行く人間が

(15) Shepherd, op. cit., p. 332 を参照。

(16) "Holy God, Holy [and] Mighty, Holy [and] Immortal, have mercy on us."

(17) Ibid., p. 333 を参照。

栄光の姿へと変えられる確信が述べられている。中世では悔い改めや禁欲生活、また資力のある者は教会への寄進によってキリストの救いに与ることが出来ると信じられていた<sup>(18)</sup>。それに対して、宗教改革により人間の業ではなく、キリストの恵みによってのみ救いに与ることが強調されている。しかし、この言葉の中で“I commend thy soule to God the father almighty (私はあなたの魂を全能の父なる神に委ねる)”と司祭が死者のために祈ることは、あたかも教会が死者の魂の行き先に影響を与えるかのような表現であり、煉獄思想とそれに関与する教会の姿を残しているものである。

この祈りの言葉に続き、黙示録 14:13 が読まれ、

また、わたしは天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである』と。」「霊」も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行いが報われるからである。」

死者がイエス・キリストに結ばれて安らぎを得ていることが宣言される。

次に、遺族と個人のための祈りが献げられる。その中には聖書の言葉が組み込まれている。

#### 祈祷 1 遺族のために

We commend into thy handes of mercy (moste mercifull father) the soule of this our brother departed, N. And his body we commit to the earth, besechyng thyne infinite goodnesse, to geve us grace to lyve in thy feare and love, and to dye in thy favoure : that when the judgmente shall come which thou haste commytted to thy welbeloved sonne (ヨハネ 5:21), both this our brother, and we, may be found acceptable in thy sight, and receive that blessing, whiche thy welbeloved sonne shall then pronounce to all that love and feare thee, saying : Come ye blessed children of my Father : Receyve the kingdome prepared for you before the beginning of the worlde. (マタイ 25:34) Graunt this, mercifull father, for the honour of Jesu Christe our onely savior, mediator, and advocate. Amen.

#### 祈祷 2 故人のために

ALMIGHTIE God, we geve thee hertie thanks for this thy servaunte, whom thou haste delyvered from the miseries of this wretched world, from the body of death (ローマ 7:24) and all temptacion. And, as we trust, hast brought his soule whiche he committed into thy holye handes (詩 31:6), into sure consolacion and reste :

(18) ゲッツ、前掲書、149頁。

## キリスト教葬儀式文の変遷（中道）

Graunte, we beseche thee, that at the daye of judgement his soule and all the soules of thy electe, departed out of this lyfe, may with us and we with them, fully receive thy promisses, and be made perfite altogether (ヘブライ 11:39-40, 12:23) thorow the glorious resurreccion of thy sonne Jesus Christ our Lorde.

遺族のための祈祷はセイラム式文によるものであり、故人のための祈祷はブツァーの著作によるものである<sup>(19)</sup>。

しかしながらここでも故人のためのとりなしの祈りは煉獄思想を思わせるものである。その内容ではなく、死者のために祈ることが神の一方的な恵みによってのみ救われるという神学を損なうものであると考えられる。

## 2.1.3. 教会における礼拝

式文の順序としては、教会における礼拝は埋葬の後に置かれているが、注意書きには、埋葬の前もしくは埋葬後に行うよう指示されており、中世のようにまず教会への葬列が行われ、そこで礼拝が行われた後、埋葬されたことも考えられる。

礼拝においては、詩編 116、139、146、1 コリント 15:20-58 が読まれた後、キリエ交唱、主の祈りが祈られる。

その後、セイラム式文からの引用された次の祈祷が唱えられた<sup>(20)</sup>。

O LORDE, with whome dooe lyve the spirites of them that be dead : and in whome the soules of them that bee elected, after they be delivered from the burden of the fleshe, be in joy and felicitie : Graunte unto us thy servaunte, that the sinnes whiche he committed in this world be not imputed unto him, but that he, escaping the gates of hell and paynes of eternall derkenesse : may ever dwel in the region of highte, with Abraham, Isaac, and Jacob, in the place where is no wepyng, sorowe, nor heavinesse : and when that dredeful day of the generall resurreccion shall come, make him to ryse also with the just and righteous, and receive this bodie agayn to glory, then made pure and incorruptible, set him on the right hand of thy sonne Jesus Christ, emong thy holy and elect, that then he may heare with them these most swete and coumfortable wordes : Come to me ye blessed of my father, possesse the kingdome whiche hath bene prepared for you from the beginning of the worlde : Graunte thys we beseche thee, o mercifull father : through Jesus Christe our mediatour and redemer. Amen.

その後、聖餐が守られた。中世のローマ・カトリック教会では、臨終において死を

(19) Hatchett, op. cit., p. 480 を参照。

(20) Ibid., p. 480 を参照。

迎えようとしている人に聖餐が与えられたが、BCP (1549) では礼拝の中で葬儀の参列者が聖餐に与っている。さらに、聖餐式が埋葬後になされることは臨終の聖餐とは全く違った意味を持っている。

聖餐式では、詩編 42 が読まれ、復活のいのちに与かる希望がテーマとなった祈りが唱えられた。

O MERCIFULL god the father of oure lorde Jesu Christ, who is the resurreccion and the life : In whom whosoever beleveth shall live though he dye (ヨハネ 11 : 25-26) : And whosoever liveth, and beleveth in hym, shal not dye eternallye : who also hath taughte us (by his holye Apostle Paule) not to bee sorry as men without hope for them that slepe in him : We mekely beseche thee (o father) to raise us from the death of sin, unto the life of righteousnes, that when we shall departe this hyfe, we maye slepe in him (as our hope is this our brother doeth) (1 テサロニケ 4 : 13), and at the general resurreccion in the laste daie, bothe we and this oure brother departed, receivng agayne oure bodies, and rising againe in thy moste gracious favoure : maye with all thine elect Saynctes, obtaine eternall joye. Graunte this, o Lorde god, by the meanes of our advocate Jesus Christ : which with thee and the holy ghoste, liveth and reigneth one God for ever. Amen.

その後、使徒書から 1 テサロニケ 4 : 13-18、福音書からヨハネ 6 : 37-40 が読まれた。前者はセイラム式文のレクイエム、後者はセイラム式文で木曜日の死者のための祈祷に使われているものである。

#### 2.1.4. まとめ

BCP (1549) の中には煉獄思想の影響はわずかに残りつつも、故人がキリストによって受け入れられたことの信頼と復活の確信が強調されている。葬儀の全体的なメッセージは、中世の懺悔と罪の赦しから、生きている人々への慰めへと変わってきている。

葬儀式文を比較した一覧表でも分かるように、BCP (1549) の葬儀式文はプロテスタント教会の葬儀式文の基礎であり、日本の葬儀式文にまで影響を与えるものである。

## 2.2. The Book of Common Prayer (1552) の葬儀式文

BCP (1549) が若干ローマ・カトリック教会の影響を残し、煉獄思想における教会の死者への関与を思わせるものがあるのに対して、第 2 祈祷書といわれる BCP

キリスト教葬儀式文の変遷（中道）

(1552) はそれらを払拭するものである。BCP (1549) がルター派教会の特徴を示すものであったが、BCP (1552) はカルバンの思想が優位を占め、古めかしいものが取り除かれ、徹底した非カトリック化が行われた<sup>(21)</sup>。

注目すべきことは BCP (1549) の “I commend thy soule to God the father almighty” という司祭によって死者の魂を神に委ねる言葉が “Forasmuch as it hath pleased Almighty God of his great mercy to take unto himself the soul of our dear brother here departed : we therefore commit his body to the ground.” と書き換えられていることである<sup>(22)</sup>。煉獄思想を背景に持つ死者のためのとりなしから、神の御心が主題となっている。「恵み深い神が死者の魂を受け入れてくださる」ことが根拠となり、遺体を地に委ねることが述べられている。

その他、聖餐式が削除され、そこでなされていた死者のためのとりなしの祈りも同時に削除されている。

### 2. 3. The Book of Common Prayer 1662/1689 の葬儀式文

1661 年に Savoy で開かれた英国国教会内のピューリタンの会議で BCP (1552) の式文の中の “resurrection” という言葉が問題視された。この小文字で書かれた “resurrection” は死者が復活するという事柄に対する確信が述べられているに過ぎないという指摘がなされた。それゆえ、BCP (1662) では、“the Resurrection” と書き改められた。冠詞が付けられ、大文字で書かれることによって、一般的な復活ではなく、終末における復活が強調された<sup>(23)</sup>。

その他、ピューリタンの影響を強く受けて、葬儀式文の前文に非受洗者、脱会者、自殺者に対してこの式文を用いる事を禁止する言葉が付与された<sup>(24)</sup>。

BCP とアメリカのプロテスタント諸派の影響を受けて作られた日本のキリスト教葬儀式文の比較表を見るならば、若干の変化は見られるが、BCP (1662) においてプロテスタント教会の基本的な葬儀式文の構成が確定したことが分かる。

(21) ナーゲル、前掲書、186-187 頁を参照。

(22) Hatchett, op. cit., p. 480 を参照。

(23) BCP (1552) : FORASMUCHE as it hath pleased almightie God of his great mercy to take unto himselfe the soule of our dere brother here departed : we therefore commit his body to the ground, earth to earth, asshes to asshes, dust to dust, in sure and **certain hope of resurreccion to eternal lyfe**, through our Lord Jesus Christ, who shal chaunge our vyle bodye, that it maye bee lyke to his glorious bodye, according to the mightie working wherby he is hable to subdue all thinges to himselfe.

BCP (1662) : FORASMUCH as it hath pleased Almighty God of his great mercy to take unto himself the soul of our dear *brother* here departed, we therefore commit *his* body to the ground ; earth to earth, ashes to ashes, dust to dust ; in sure and **certain hope of the Resurrection to eternal life**, through our Lord Jesus Christ ; who shall change our vile body, that it may be like unto his glorious body, according to the mighty working, whereby he is able to subdue all things to himself.

(24) この言葉は、1928 年の祈祷書まで書かれていた。

また、ルター派の教会も BCP (1552) を取り入れており、プロテスタント教会の葬儀式文の基本的な構造は英国国教会の BCP (1552・1662) において形成されたことが明白である。

#### 2.4. 死者のための祈りの復活

以上、葬儀式文の基本的な構造が BCP において確定したことを見てきた。BCP において非常に神経質に死者のためのとりなしの言葉や祈りが排除されてきたが、近年の葬儀式文において死者のための祈りが復活していることを言及しなければならない。

その背後には、リタージカルムーブメントまたエキュメニカル運動の発展によって各教派との交流が深まると共に礼拝の要素を交換するようになったことがある。古い礼拝の伝統への関心の高まりやカトリックの信仰復興運動もあり、プロテスタント教会の中にも死者のための祈りが取り入れられるようになった。

また、第1次世界大戦や第2次世界大戦等によって多くの死者を出し、死者は間違いなく天国の至福の中にいることを語ることへのためらいがありつつも、死者に関して何かを語りたいという感情によって死者に関する祈りが葬儀の中に取り入れられるようになったといわれている。

また、葬儀の神学的意味が議論され、それによって葬儀式文の言葉が規定されるというよりも、むしろ実際に行われている事柄が取り込まれていく形になる。それだけ、教会と社会との関係が隔たり、教会の神学が社会の思想を導くのではなく、社会や民衆の必要に教会が対応する形で葬儀式文が作られているのが実情であろう<sup>(25)</sup>。

### おわりに

現代の葬儀式文の原型となるものは BCP (1549) の葬儀式文である。その中に織り込まれた要素は、セイラム式文やブツァーの式文からの引用であるが、宗教改革の精神に則り、葬儀式文全体を整えたのは、BCP (1549) であった。その後、さらに煉獄思想への批判、非カトリック化が突き詰められ、ピューリタンの影響を受けて変化してくるが、葬儀式文の基礎となる構造と聖書や祈りの言葉は BCP (1549) において見いだすことが出来る。

実際には、BCP (1549) から発展した BCP (1552・1662) の葬儀式文を各プロテスタント教派が自身の式文にとりこんでいったことが分かる。そして、葬儀式文はそ

(25) 現代のキリスト教葬儀の傾向については J. F. ホワイト著・越川弘英訳『キリスト教の歴史』、日本基督教団出版局、2000年、433-439頁を参照。

## キリスト教葬儀式文の変遷（中道）

それぞれの時代の神学的な特徴に影響を受け、社会状況の中で変化してきた。しかし、その過程で神学的議論が優先されすぎると死によって愛するものを失った人間の悲しみが二義的なものとして低く見られているのではないだろうか。例えば、自殺者や未受洗者には葬儀式文が用いられてはならないという規定は、現代から見るならば非常に冷酷な判断であるといわざるを得ない。またそのような規定自身が、死をさらにキリスト教化し、教会の権威を高め、あたかも教会が死者の死後の運命を握っているかのような錯覚を与えかねない。

葬儀式文とその背後にある葬儀に関する神学思想の変遷をたどることによって、現代の葬儀に関する神学的な理解を批判的に検証する助けとなる。初期キリスト教会では死に打ち勝ち希望を与える葬儀であったのに対して、中世では懺悔と罪の赦しが葬儀のテーマとなり、非常に手の込んだキリスト教葬儀へと発達した。中世の行きすぎた葬儀の発達に対する批判から生まれた宗教改革は、葬儀において復活の希望と共に死者ではなく葬儀に参列する人間の慰めと信仰を問題にするようになった。簡素化されたプロテスタント教会の葬儀は遺族の慰めを語りつつも、遺族がグリーフワークとして悲しむ場と時としての儀礼を失ってきたのではないだろうか。それを補完する役割として、ホスピスやターミナルケアが必要と見なされている。この様な変遷を顧みつつ、現代において何を葬儀式文のテーマとし、どのようなキリスト教死者儀礼を再構築するのかということが問われねばならない。